

希望の光

5年 S・Tくん

東日本大震災の翌年、ぼくは生まれた。津波の映像を見るだけで、悲しい気持ちになった。あの大きなゆれの中、津波の中で、たくさんの命がなくなった。人々に残されたものは深い悲しみと絶望だけだと思っていた。

しかし、「海よ光れ」の中では、希望の光が光り続けていた。大災害に直面しながら、希望を忘れなかったのは大人だけではなく、ぼくと同じ小学生の子供達だった。

「大人には決してできない部分をしっかりと支えていたのです。子どもたちは、被災した人たちに大きな力を与えてくれました」

役場職員の方がこう振り返っている。不便で大変な避難所での生活で、自分達にできることを必死に考え、前を向いて立ち上がるうとした子供達。

「負けるな よみがえれ 大沢の海よ光れ」大沢小学校の子供達がつくった新聞のタイトルのように、ぼくは人間の強さを知った。津波によって、家が流され、街がこわされ、おそろしい自然の力になす術もない人々の姿。そこに、命のほかささしか感じられなかったぼくは、失われることのなかった希望の中に、人の強さを見た。

困難に直面した時、うずくまって悲しみに絶望するのではなく、立ち上がる強さが人にはあることや、一人では難しいことでも、助け合い、他人を思いやることで、新しい可能性の光がかがやくことを、この本は教えてくれた。きつと、大沢小学校以外の避難所でも、同じ様なことが起きたのだらうと思う。

東日本大震災から十数年が過ぎた今、復興が進んでいる街の様子を、テレビのニュースで見た。高台に新しく建てられた家々。そしてそこに新しくたん生した命のかがやき。その全ては、あの日の被災者達が希望を失わずに、立ち上がったからあるものだと思う。